

2012年度 第5回 協働実践研究会研究会 報告

去る2013年3月23日、早稲田大学にて、協働実践研究会第5回研究会が開催されました。今回は、午前中にワークショップを組み込み、口頭発表も2つの教室に分かれて分科会形式にしました。当日は、多くの方に来ていただき、様々な分野での実践を共有できました。プログラムの概要と当日の様子をご報告いたします。

1. 協働実践研究会主催によるワークショップ

「協働だからこそできることばの教室の可能性について実感できる」場作りを目指した、協働実践研究会のワークショップ実行メンバー(鈴木寿子・トンプソン美恵子・房賢嬉)によるワークショップの様子をご報告します。

このワークショップでは、「協働を、スキルとして捉えることを超えて、生き方を考えるための協働とはいかにあるべきかを考える」ことに焦点が絞られていました。そして、私たちの生活に不可欠の「食」の問題を取り上げ、「対話的問題提起学習」と「ロールレタリング活動」という、ちょっと耳慣れない名前の活動を組み込んだものでした。

参加者のみなさんは、4人で1グループになり、まず、事前課題(自分の「食」について考える)を共有した後、食品産業の実態を告発したアメリカのドキュメンタリー映画『フードインク』からの映像を見ました。鶏肉の大量生産の過程は、あまりにも「生命」からかけ離れていて衝撃的でした。

この後、ペアでこの映像を見て感じたことについて話し合いを行いました。この活動は、社会生活で身近に起きている問題を他者と共有し、対話を通して解決の糸口を模索する「対話的問題提起学習」の枠組みを用いて、議論すべき問いが組み立てられています。私が参加したグループには、子どもさんがいらっしゃる方や、ご家族が農業を営んでいらっしゃる方もいらして、興味深いお話やご意見をうかがうことができました。

さらに、「ロールレタリング活動」に取り組みました。これは、まず、映像に出てきた人物に向けて手紙を書き、続いて、その人物になったつもりで、その手紙に返事を書く、というものです。この活動は初めてでしたが、自分が一人二役することで、消費者と生産者という2つの立場から、この状況を見つめる経験をしました。問題を複数の「当事者」の目で捉えてみることで、新たな解決の突破口を見いだす、よい方法だと思いました。グループで、この活動と対話についてふり返りをしたときは、ファシリテーター役のメンバーが合図しても気づかないほど、みんな話し合いに熱中していました。

最後にまとめとして、日本語教育における協働の捉え直しの提案がなされました。これからの日本語教育は、4つの問い(①世界はどうなっているか(世界認識)、②その中でどのように生きていくか(行動基準)、③他者とどのような関係を築いていくか(人間関係)、④私とは何か(アイデンティティ))を基盤とする持続可能性日本語教育を目指すものであり、協働は、これを支えるものであることが示されました。

(文責: 岩田夏穂)



2. ポスター発表

今回は 5 つのポスター発表のエントリーがありました。いずれのポスターの前にも、発表者の説明に熱心に聞いている参加者のみなさんの姿がありました。

- ①発表者: 高橋淳二・田中奈緒(早稲田大学大学院日本語教育研究科 修士1年)
タイトル: 「場」の生成についての考察 – 活動型授業における実践者らの振り返りから –
- ②発表者: 赤石恵理子(NIPPON 語学院)
タイトル: 作文授業での学生と教師の協働
- ③発表者: 武 一美(早稲田大学日本語教育研究センター)
タイトル: ケース教材を使った初中級レベル授業実践 – 問題発見と解決を協働で行うことの意味 –
- ④発表者: 中尾桂子(大妻女子大学短期大学部国文科)
タイトル: ピア・レスポンス導入授業の学期末レポートに見られた「論述」性と「主観」性
- ⑤発表者: Pasca Roman(ロマン パシユカ)(早稲田大学大学院日本語教育研究科博士後期課程)
タイトル: 日本語教師が何を「協働実践」とみなしているのか – ルーマニア人日本語教師のライフストーリー・インタビューから見てきたもの –



3. 口頭発表

【グループA】

進行担当：原田三千代（桜美林大学）

発表者①：李静（大阪大学 言語文化研究科 博士後期課程 1年）

タイトル：「中国大学の日本語作文教育におけるピア・レスポンスに関する意識調査—学習者へのアンケート調査をもとに—」

最初の発表は、教室活動導入前のピア・レスポンスの意識調査であるという点で新しい試みだと考えられます。フロアからは中国の学校教育での作文教育の実態や ESL での学習者の意識の違いなどの質問ができました。実施に当たっては、学習者に活動の意義を十分に理解させる必要があることが示唆され、実際の実施者である教師自身に対するアンケート調査をすることで、より実現性が高まるのではないかと考えられます。

発表者②：神村初美（首都大学東京 国際センター）

タイトル：「大学院での専門日本語教育に協働学習を用いる可能性と問題点—三年間にわたる調査授業でのプレ・ポスト作文比較から—」

次のご発表は、大学院での専門日本語教育調査授業におけるプレ・ポスト作文比較に関する研究をまとめられたものです。説得力のある文章展開や専門的視点に立った内容的向上がみられた点に特徴があり、「読み」と「書き」のつながりや対話を通して学びを深めるといった協働学習が相乗作用をもたらしたのではないかと示唆されました。しかし、すでに比較的高度な専門知識を持つ学習者は、ピア活動よりも教師による授業をのぞむ傾向があることも指摘され、授業参加意欲や協働学習の準備段階につなげる工夫をする必要性が今後の課題とされました。

発表者③：宮崎七湖（早稲田大学日本語教育研究センター）

タイトル：「留学生のためのケース教材を用いた日本語教育実践—自分のケースを書く活動の意味—」

最後の発表は、ケース教材を日本語教育に応用したもので、ポスター発表でも同様の研究が取り上げられていました。活動参加者が自分のケースをカミングアウトした場合のクラスの雰囲気について質問が出ましたが、話し合いの過程で自ら自分のケースだと言える、あるいはより詳細な情報を提供したくなる雰囲気であったことなどが報告されました。また、ケースを書いた後の作文の訂正については、文法的な誤りがあれば書き換え、内容的につじつまが合わないものに限っては多少の修正を加えたということでした。日本語教育におけるケース教材の応用の可能性は今後も広がっていくのではないかと考えられます。（文責：原田三千代）

【グループB】

進行担当：池田玲子（東京海洋大学）

発表者①：北村直也（寝屋川市立桜小学校）

タイトル：「学校経営と協働する教師たち」

桜小学校では学校全体の研究テーマとして「表現それは表に現れたる人としての育ち」を掲げ、互いに認め表現し合える個と集団を目指して約 7 年間さまざまな取り組みをされてきたそうです。本発表は、こうした桜小学校での協働の取り組みが校長である北村先生のリーダーシップのもと、どのような形で実践されたのか、この実践を推進する組織化はどのように形成されたのかについての報告でした。

桜小学校の協働を推進してきた組織の特徴は、「ハイパーテキスト型」、「プロジェクト型組織型」です。多くのテキストがネットワーク上に連結状態にあり、協働的に知識創造を進めていくというものでした。この協働は具体的な実践として「公開授業研究会」や「オペレッタ・ダンスプロジェクト」、「オータムコンサート」といったかたちで実現されました。

最近はいじめの問題はもとより、「モンスターペアレント」や「教師の体罰」など教育現場ではますます深刻化している中で、北村先生をリーダーとした桜小学校の教師と生徒たちの協働の実践は、聞く人の目を覚ますような刺激的な内容でした。たとえば、桜小学校の教師達はそれぞれ各自の業務を終えた後に体育館に集まり、何時間ものダンス練習に励んだそうです。その光景はまるでどこかのダンススクールの映像かと見まちが

えるようなものでした。また、生徒たちの音楽会(オータムコンサート)の映像では、まさか上手な生徒だけを選抜したのかと疑いたくなるような素晴らしい全員演奏でした。

本発表会場では、この実践報告によって、協働することの創造力と関係性構築の力を改めて確認することができました。

発表者②: 江原恵美子(早稲田大学日本語教育研究センター), 牛窪隆太(早稲田大学日本語教育研究科) 古賀和恵, 佐藤正則, 梅津聖子, 鈴木綾乃, 山本実佳(早稲田大学日本語教育研究センター)

タイトル:「教師の協働性を生み出すもの―「教材の共有化」という事象を通じて―」

本発表では、一つの教育現場に勤務する複数の教師たちが授業の進め方について疑問を持ち始めたことを契機として立ち上げた「授業勉強会」についての報告でした。

教師の協働によるプロジェクト立ち上げは、日本語中級クラスを担当する数名の教師たちが主体的に参加するものでした。そのコースが採用している日本語教科書による読解授業の進め方に疑問を持ち始めたところに発端があったそうです。この課題をもとに、コーディネーターはカリキュラム変更を決断し、ここから中級クラスの教材共有化に向けてプロジェクトが開始します。教師たちは各自の疑問を検討しあい、そこから新たな教材作成を試みる作業に入ります。しかし、教師の協働が常に順調に展開するものではない事実があったことも報告されました。この協働の実践を阻止した要因は、途中で出現した「ただ乗り行為(フリーライダー)」だったということでした。

この教師の協働プロセスの分析からは「教師を軸にした協働」と「学生を軸にした協働」の実態が提示されました。「より良い授業」のために、教師の自己成長の必要性と自己の成長のプロセスに現れる壁を乗り越えるための協働の必要性が指摘されました。また、より良い授業とは学生にとってのより良い授業ではないかという指摘もありました。

まとめとして、教師の協働を生み出すものは何かという問いに対し、「教師の授業エネルギーが常に学生に向いていること」と「協働は学生を媒介としてクラスを超えて生まれていくもの」であり、ここに協働の必要性と同僚性が発揮されるという結論が提示されました。

本発表では、教師の協働が詳細に分析されたことで「協働の壁」の実態が明確になり、そのことによって次の段階の課題やエネルギーが生み出されたのだと解釈できました。つまり、誰もが懸念するようなトラブルは教師の協働に出現するのだが、そのトラブルがあってその後の再興の取り組みをより深く、タフにするのではないかと理解できる。今後の協働のプロセスに強く期待したくなる報告でした。

発表者③: 崔鉉弼(チェ ヒョンピル)(早稲田大学大学院日本語教育研究科 博士後期課程)

タイトル:「協働研究における研究者の役割と成長を考える」

本発表は、韓国の日本語教育現場において発表者が関わった7か月間の教師と研究者の協働についての報告でした。発表時点ではこの協働はすでに第二段階に入っているとのことでしたが、本発表ではその前にあった第一ステージの実態についての分析・考察でした。

この協働研究を進めてきた主体は、韓国の普通高校の教師と4年生大学の教員、そして本発表者である研究者の3名です。2名の実践者(教師)の授業を記録、観察し、それについてのカンファレンスを重ねています。こうした「立場の異なる主体同士の協働実践」に限らず、協働は常に順調に進むものではありません。この報告では、協働に不可欠の対話には、常に研究についての頻繁なコミュニケーションが重要であるという指摘がありました。本協働研究のプロセスには、すでに何らかの関係性があった主体同士だからこそ起きた問題が非常に深刻化していったと捉えているようでした。また、研究者の立場の者が研究に対する省察が不十分だったことも協働研究を困難にしたと考察されていました。つまり、協働の主体同士はそれまでの信頼関係に過信するのではなく、協働の実践の中で絶えずコミュニケーションをとりながら、他者に期待することと変化する他者の認識を確認していく必要があることという主張だったと思います。

会場からは、「そもそもなぜこの3名は協働する必要があったのか」という質問や協働研究者(自分)が仲間(実践者)の期待に応えていなかった事実を発見したとき、「失敗」という表現で繰り返し提示されたのには違和感があるという指摘もでした。信頼関係は可変的なものであるものの、協働の実践においては自分と他者との間のずれは自明の事実ではないでしょうか。このずれを「失敗」と捉えるのではなく、次なる「課題」と捉えていくことのほうが協働することの意味の追究につながるのではないかと思われました。(文責:池田玲子)